

『万葉集』から見る日本の古典

獨協大学特任教授 城崎 陽子

壬申の乱 — その1 —

先回は近江遷都を取り上げ、近江朝廷の文化的様相にふれた。今回は天智天皇の崩御による近江朝終焉と、それに続く壬申の乱を取り上げる。

先ず、天智天皇の崩御に至る経緯を『日本書紀』でみてみよう。

九月に、天皇、**寢疾**不_レ予_レしたまふ。
 「或本に云はく、八月に、天皇疾病したまふといふ。」(中略)
 辛未(八日)に、内裏にして、百日の眼を開けたてまつる。是の月に、天皇、使を遣して、**袈裟**・**金鉢**・**象牙**・**沈水香**・**栴檀香**と諸の珍財を法興寺の仏に奉らしめたまふ。

庚辰(十七日)に、天皇、**疾病**弥留し、勅して東宮を喚し、臥内に引入れ、詔して曰はく、「朕、疾甚し、後事を以ちて汝に属く」と、云々のたまふ。是に、再拜みたまつりたまひて、疾を称して固辞びまをし、受けずして曰したまはく、「請はくは、**洪業**を奉けて、大后に付属けまつり、大友王をして諸政を奉宣はしめむことを。臣、請願はくは、天皇の奉為に出家して修道せむ」とまをしたまふ。天皇許したまふ。東宮起ちて再拜し、便ち内裏の仏殿の南に向てまして、**胡床**に踞坐し、髪髪を剃除りたまひ、

沙門と為りたまふ。是に天皇、次田生磐を遣して、袈裟を送らしめたまふ。

壬午(十九日)に、東宮、天皇に見え、吉野に之りて修行仏道せむと請ひたまふ。天皇許したまふ。東宮即ち吉野に入りたまふ。大臣等、侍送り、菟道に至りて還る。(中略)

十二月の癸亥の朔にして乙丑(三日)に、天皇、近江宮に崩りましぬ。

九月に病に倒れた天智天皇の病状は思わしくなかつた。病氣平癒を祈るため、法興寺(現在の飛鳥寺)に様々な供物を奉つたが、病状は迫るばかりであつた。この時、天智天皇は「東宮」であつた大海人皇子(後の天武天皇)を枕元に呼び寄せ、後のことを頼んだのである。しかし、大海人皇子は太后と大友王に「洪業」(天下の政治)



大海人皇子が伊勢神宮を遥拜した地に建つ志氏神社

を託すの良いとして、天智天皇の申し出を断り、むしろ出家して天皇の病氣平癒のために修行をしたいと願つたのである。そして、それが許されると、早速に髪や髪を剃つて僧侶の姿となり、仏道修行に励むため大海人皇子は吉野へと隠棲してしまふ。そして、十二月三日、天智天皇は崩御するのであつた。

ところで、天智天皇が崩御し、「殯」が行われていたところ、「童謡」が流行つたことが『日本書紀』に記されている。

癸酉(十一日)に、新宮に殯す。時に童謡ありて曰く、
 み吉野の吉野の鮎、
 鮎こそは島傍も良、
 きえ苦し水葱の、
 下芹の下吾は苦

しゑ「其の一」
 臣の子の八重の紐、
 解く一重だに、
 まだ解かねば御子の紐、
 解く「其の二」

「童謡」はいわゆる「子供の歌」ではなく、社会的な事件に対して予言したり、諷刺したりする歌の事を指す。「其の一」は吉野の鮎は吉野川の島の辺りに所を得て良いが、「吾(大海人皇子)」は「水葱」や「芹」の下にいて苦しいことよ、と吉野に隠棲した大海人皇子のことを諷刺して詠う。「其の二」は、幾重にも重なつた「紐(難問の意)」を近江朝の廷臣が一重も解かないうちに「御子(大海人皇子)」が解いてしまったと、壬申の乱の収束を予言して詠う。「其の三」は、自らの思いを人づてに伝えてきた男に対する不満を述べた

女の歌の様相ではあるが、大海人皇子が直接訴えることを民衆は望んでいれることを詠っている。このようにした歌は意図的に発生するものであるが、歌が予言や諷刺の役割を担うことが注目される。大海人皇子の吉野隠棲や天智天皇の崩御がそれだけ大きな出来事であり、世の中が動くことが民衆にも感じられていたのかも知れない。

さて、天智天皇の崩御後、事態は急を告げた。翌年の五月にたまたま美濃国へ私用にかけた大海人皇子の舎人が近江朝廷側が、「山陵を造る」といつて人夫を集め、それに武器を携帯させているという情報をつかんで吉野に戻つてきた。その他近江京から倭京に至るまで、道の要所に斥候が配置されているとか、大海人皇子への食糧の搬送が止められているといった情報も流れてきた。そこで、六月二十二日、大海人皇子は使いを美濃(岐

卓(南部)に送り、兵を集めて美濃と近江を結ぶ不破の道を押さえるよう指示する。また、二十四日には、みずからも吉野を出て東国へと向かつたのである。従つたのは、妃の鸕野讃良皇女(後の持統天皇)ほか草壁皇子・刑部皇子(忍壁皇子)など二十人余りに過ぎなかつた。

東国への道は夜を徹してたどられ、翌二十五日には、近江から脱出してきた高市皇子と伊賀の積殖の山口(三重県伊賀町拓殖町)で合流した。一行はさらに鈴鹿山地を越えて伊勢に入り、二十六日の朝には、「朝明郡の途太川」(三重県三重郡の朝明川)のほとりて戦勝を祈願して天照大神(伊勢神宮)を遥拝した。ここで近江を抜け出てきた大津皇子を迎え、高市皇子に不破での軍事の統括を指示する一方、兵を集めるべく東海道と東山道の国々に使者を派遣したのであつた。

高尾山の昆虫

コカマキリ



盛夏のカブトムシやクワガタと並んで、秋季のカマキリは子供たちに人気が高い昆虫です。

前者のオスは頭部や大アゴがツノ状に発達し、甲冑をまとつた戦士を思わせ、一方カマキリは前脚が鎌状に特化した武器を持ち、草原の最強のハンターであることで、共に怪獣的イメージがあるため子供たちが親近感を覚えるでしょう。

実際に自分たちよりも遙かに大きい人に対しても、ひるむことなく大アゴを目一杯掲げて構えたり、翅を掲げ前脚を揃えてコブラのような飛びかかるポーズをとったりして威嚇する等の気が強いところも共通しています。

コカマキリは小型のカマキリで、高尾でも一番目にするのが多い種で、薄茶色をした個体が大半ですが、稀に緑色の個体も出現します。

茶系の体色では草原で獲物や天敵に見つかりやすいのではと思つていた所、枯れ草の色にうまく同化するよう保護色の役割を果たしています。

大型種のおオカマキリやハラビロカマキリに比べ地味な印象を持ちますが、鎌状の前脚の内側はピンク、黄色、黒の三色の紋が並び、さながらタトゥでも入っているようなワンポイントのお洒落さを感じます。

(撮影・文松島 孝)